
私のおじいちゃん

小森新斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私のおじいちゃん

【Nコード】

N5460P

【作者名】

小森新斗

【あらすじ】

いざ、年金を探すあてのない旅へ

く凍とシルバーく（前書き）

おじいちゃんが主役です

く凜とシルバーく

おじいちゃん「あゝあゝ？ テメエすかしてんじゃねえぞこらア！」

孫「おじいちゃん！ 自動販売機に喧嘩売らないで！」

私は孫！

おじいちゃん「つ子の今をときめく小学五年生！」

愛されガールな私はいま、おじいちゃんとお散歩中なの！

おじいちゃん「あ？ おつといけねえ！

ワシもヤキがまわったか」

孫「ボケるにはまだはやいよ、おじいちゃん」

最近おじいちゃんがちょっと変なの。

これがいま流行りの痴呆ってやつかなあ？

流行を先取りするなんてさすが私のおじいちゃん！

おじいちゃん「んでよオ、ダチとそのまんまオールしてよオ」

孫「おじいちゃん、その話5回目だよ？」

でもでも、やっぱり心配。

時代の先端に行くにはリスクがいるからね。

おじいちゃんの話が37回目にさしかかったとき、家に帰りつきました。

お母さん「お帰りー、ずいぶん遅かったわね。

「ご飯出来てるわよー」

孫「ただいまー」

おじいちゃん「あゝ？なんじゃって？聞こえんわい」

お母さん「ご飯出来てるわよー！！」

おじいちゃん「マジか、入れ歯とってくる」

おじいちゃんが靴はいたまま洗面所へ向かいます。

おじいちゃんつてば、アメリカン！

私は食器の用意をします。おじいちゃんも装備を整え、食卓を囲みます。

おじいちゃん「おー、今日はすき焼きじゃな！」

お母さん「いっぱい食べてくださいね」

楽しい夕食。

そういえば、とおじいちゃんが思い出したように口を開いたよ。

おじいちゃん「本屋で最近買った『おじいちゃんのための痴呆予防』がどこかに置いて忘れてしもった」

孫「もうー！おじいちゃん！その本なくすの10回目だよ！」

お母さん「……」

お母さんは私とおじいちゃんのやりとりに悲しそうに首を振ります。

そんなこんなのでご飯を食べ終わりました。

おじいちゃんは、庭で煙草を吹かしています。

おじいちゃん「あー、かつたりいなア」

おじいちゃん、縁側に座ればいいのに。

なぜか庭で股を開いて膝に肘を乗つける、俗に言う『うんこ座り』をしていた。

孫「おじいちゃん、明日老人会だよ」

おじいちゃん「おお、そうじゃったな！」

おじいちゃんが嬉しそうに顔を輝かせ、続けます。

おじいちゃん「ター坊の野郎からまだ麻雀のツケとってねえからなあ」

おじいちゃん「その人、先月亡くなったじゃない…」

おじいちゃん「あいつとはガキン時からやんちゃしてよオ」

でも、嬉しそうに話すおじいちゃんにそんなこと言えなかった。

翌日、私はおじいちゃんと老人会にいきました。

おじいちゃん「うーす」

桶川さん「チャッス！」

片岡さん「おうおじいちゃんぢやエか」

笠松さん「大変じゃー！」

息を切らして笠松さんが飛び込んできました。
大丈夫？

おじいちゃん「どうしたんじゃア」

よく見ると笠松さんは背中に村田さんを背負っています。

笠松さん「村田がやられた…！」

「「な、なんじゃってー！！？」」

おじいさんたち十数人の声が重なります。

おじいちゃん「たつつん！相手は誰なんじゃア！？」

村田さん「相手ア隣の街の老人会の連中じゃ…ざまあねえな、若葉町の切り込み隊長のワシが…」

片岡さん「ぐう！奴らはワシ達の老人会と何回も抗争しとるからのオ！」

まあ大変！

なんか物騒な話になったよ！

桶川さん「まちパネエ！」

笠松さん「奴らとの長げえ抗争に終止符をうつぞい！入れ歯ガタガ
タいわしたる！」

笠松さんがゲートボールに使う木の棒を掲げます。
またぎつくり腰になるよ笠松さん。

おじいちゃん「いくぞイ！！！！」

奴らの介護用おむつを狩ってやるんじゃアア！！！！」

じいさ「おおおおおおおおおおおおおお！！！！
！！！！」

これは大変！

最近のキレやすい老人は私の手に負えません！

片岡さん「入れ歯安定剤はいつもより30割増しで塗りたくれエ！
それだけで大分違うぞい！」

どうしよう。

片岡さんのせいで知らない知識が増えちゃったよ。

じい達はそれぞれゲートボールの木の棒や杖を構えぞろぞろと移
動します。

孫「おじいちゃん！奴らのシマは分かってるの！？」

おじいちゃん「ああ！

敵さん、この時間はよオ、若葉川の土手でたまってんじゃ」

桶川さん「まぢ若葉川はワシらのシマなんですけどー、て感じでー
！チヨー片腹痛いしー！！」

おまわりさん「こんにちはーいい天気ですねー」

片岡さん「やべ！ポリ公じゃ！」

みんなが杖とゲートボールのアレをさつと隠す。

おまわりさんはにこやかな笑みを浮かべ去っていった。

じじい「ふー、まぢパネエー」

笠松さん「サツの厄介になつたらまた息子とその嫁さんに老人ホームにぶちこまれっからなア！」

笠松さんが誇らしげに武勇伝を語る。

おじいちゃんの老人会では突っ張って老人ホーム送りになるのは美德らしい。

突っ張ることが年金暮らしのたった一つの勲章なんだって。

私は子供だから分かんないかな。テヘ！

じ
じ
い
s
「
ゼ
エ
ゼ
エ
…
」

土手に着いたときには太陽は沈みかけていました。

おじいちゃん「着いたぞい……！ 奴らもいるツ……！」

あ、本当に隣町の老人会の人たちだ。

おじいちゃん「たのオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ」

おじいちゃんの咆哮が大気を裂いた。
隣町の老人会が一斉に顔を上げる。

青田さん「なんじゃアア！！！！ワリヤア！？」

そのうちの1人がおじいちゃんにガンをとばした。

桶川さん「あ、あれは青田ツス！」

知ってるの！？

桶川さん！

桶川さん「やつは隣町の老人ギャングチーム（老人会）『老眼狂』のリーダー青田ツス！」

青田さん「来たみてエじゃなア！！」

若葉町の長老はなちやうにして若葉町老人会『MOMOHIKI』のヘッド、

おじいちゃん！

てつきり逃げ出すかと思ったゾオイ！」

おじいちゃん「青田…ッ！ワシはテメエと違って逃げるなどしねエのじゃ！！！」

おじいちゃんが言いながら土手をよたよたと丘を下る。

おじいちゃんに若葉町老人会…いや、若葉町老人チーム『MOMOHIKI』が続いた。

青田さん「なんじゃとお！もいつぺん言いてみイ！」

青田さんが凄い剣幕で怒鳴り、老眼狂の面々もおじいちゃんに野次

を飛ばします。

おじいちゃんがゆつくりと歩き、青田さんと対峙し、言いました。

おじいちゃん「消えた年金問題…増加する高齢者の一人暮らし…介護問題…

背けたくなる現実はあるう。

じゃが！その鬱屈したツ！テメエの想いは！
御しきれない！熱さで！

ワシの仲間を！傷付けたツツツ！！！！！！
それは許せん！許せんじゃア！！！！」

青田さん「ぐ…！テメエなんぞに…何がわかるツ！！しょせんワシ
達は社会から第一線を退いてしまってるんじゃア！！！！」

おじいちゃん「フツ…それは違うな…青田ツ！
言っても分かるまい！

これより語るは拳のみ！」

おじいちゃんと青田さんが同時に地を蹴った！

おじいちゃん「青田アアアアアアアアアアアアアアアアアアア
ア！！！！」

青田さん「おじいちゃアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
アアアアアアン！！！！！！！！」

二人の獣の咆哮を合図に、戦が始まった！

片岡さん「かかってこいやアアア！！！！」

桶川さん「まぢパネエ！」

笠松さん「ホアタアアアアアア！！！」

砂煙が巻き起こり、視界が奪われます。

おじいちゃん！どこにいるの！

栗林さん「まちな！お嬢ちゃん！」

目の前に腰の曲がつたお爺さんが現れた。

もう！邪魔しないでよ！

栗林さん「青田のダンナの邪魔アさせねえぞオ！」

栗林さんがよたよたと杖を振り上げ襲い掛かってきます。

んもう！この街のじじいはファンキー過ぎるよ！

栗林さん「ッ！！」

不意に、ゲートボールのボールが栗林さんの足下に迫ります。

栗林さんは素早く反応し、杖で弾きました。

笠松さん「こいつはワシに任せい！」

笠松さん！

さすが街一番のゲートボーラー！

孫「笠松さん！ありがとう！」

栗林さん「ふんっ…憐れなもんじゃな…！
身の程を知らぬじいはツツ！！！」

栗林さんが腰からもう一本取り出し、逆手に構えた。
そ、そんな！二刀流なの！

笠松さん「どっちが憐れか、今にわかるぞい！」

笠松さんがそう返して、ゲートボールの木の棒を上段に構える。

笠松さん「孫ちゃん！早く行ってやんな！」

孫「分かった…笠松さん！また腰に湿布貼ったげるからね！」

私はわき目も振らず駆け出した。

とたんに首筋に何か冷たいものを感じ、前転で回避動作をする。
私がいた地面は、大きく歯形が残され抉れていた。

一体なんなの！？

中尾さん（兄）「今のを躲すとはのう」

両手に入れ歯を装備したお爺さんが現れた！

中尾さん（弟）「じゃが、次は躲せまい」

いや、もう1人いる！

このお爺さん双子だ！

孫「ふん！体育の成績は5なんだからね！」

私は低い姿勢のまま駆け出そうとする。

が、まるで足をとられたようにバランスが崩れ手をついた。
靴の底にべったり付いてるのは…ポリデント!?

中尾さん（弟）「クツクツクツ…」

中尾さん（弟）がさも愉快そうにポリデントをちらつかせた。
しまった！罠だったのね！

中尾さん（兄）「唸れ！轟け！総入れ歯ア！」

中尾さん（兄）が鋭い踏み込みとともに、右手の入れ歯を繰り出す。
やだ！死因が入れ歯なんてドンキーゴングじゃあるまいし洒落にな
らないよ！

その時、眼前まで迫る入れ歯が何かに弾かれた！

中尾さん（兄）「指弾ッ!？」

な、何者じゃあア!？」

『何か』が回転しながら自由落下する。

白い面と黒い面がある、平たい石のようだ。

ま、まさか！

片岡さん「間に合ったか」

片岡さん！

囲碁に使う碁石を握りしめた片岡さんが、そこにいた。

桶川さん「チョリッス！」

片岡先輩、マヂ1人でカッコ付けすぎッスよ。

ワシにも戦う理由あるんすよ?」

桶川さんまで!

孫「2人ともありがとう!」

礼を言いながら、靴を脱いだ。

靴は完全に固定されてるためだ。

中尾さん(弟)「なぜじゃ!なぜ邪魔しやがるシャバ僧があ!」

片岡さん「ふつ、仲間の孫を助けるのに理由がいるかい?」

桶川さん「いやー!可愛い孫ちゃん見殺しにするってマヂないっしょ!?パネエ!」

中尾さん(兄)「ならば我が入れ歯の錆びにしてくれる!行くぞ弟!」

中尾さん(弟)「言われずとも!」

片岡さん「来る...!」

あれだ桶川!

孫ちゃん!目を潰れ!」

私は言われるがまま目を閉じた。

桶川さん「桶川フラッシュ!」

一瞬、目蓋の上からでも強く感じる発光が起きた。

一体何が起きてるの!?

中尾(兄)「ぐう!目が!」

片岡さん「もう目を開けてもいい!

さあ、おじいちゃんのとこまで行つてやんな!」

孫「ありがとう!」

私は頷き、走りだす。

橋の下に2つの人影があつた。

おじいちゃんだ。

青田さん「くそ...!」

おじいちゃん「おらおらア!

とれえんだよオ!」

青田さんの大振りな右拳をスウエーで躲し、泳いだ身体におじいちゃんの容赦ない拳が突き刺さる。

青田さん「ぐ...!まだだ!まだ!働ける!」

青田さん...

もう定年過ぎまくりじゃない。

もう...いいんだよ...

青田さん「年齢に負けた!じじいがア!」

青田さんがほえながらハイキックを見舞う。

おじいちゃんが片手で受け、お返しとばかりにローキックを放つ。
青田さんが、がくりと膝をついた。

青田さん「く…そ…！
なんでじゃ…！」

おじいちゃん「青田ア…
もっいいんじゃ…」

おじいちゃん……

く凍とシルバーく（後書き）

読んでくれてありがとうございます（*^―^）

オジー・チャン

青田さん「よくねエ！！！」

「ワシはまだア！社会で暴れたりないんじやア！！！！！！」

青田さんが気力で立ち上がった。

おじいちゃん「馬鹿が……」

おじいちゃんが煙草を取出し、火を付けた。

[illegible]

咆哮とともに右拳を固め思い切り振りかぶる。

おじいちゃん
は避けようと
もせずただ
紫煙を一つ、
吹かす。
鈍い音が響き、
煙草が宙を躍った。

青田さん「ハア……ハア……あんたは旧日本軍の頃からワシの憧れ
じやった…」

昔のあんたなら！今の日本にキレてるはずじゃ！」

おじいちゃんが手の甲で、口の端の血を拭う。

おじいちゃん「お前にも家族がいるじゃろう。ワシは賭けてみたいんじゃない。今の若者に、な」

おじいちゃんが私の方を向き、ウィンクした。

孫「おじいちゃん…」

青田さん「……」

おじいちゃん「それでも自分で社会を変えたいというならやり方を変えろ。」

そして…また供に戦おう、青田大尉」

青田大尉「おじいちゃん元帥……」

その時、たくさんの足音が聞こえてきました。
おじいちゃんがフツ、顔を綻ばせます。

おじいちゃん元帥「それによオ…ワシだけじゃねエ…
こんなにもいるじゃねエか…仲間ってやつがよオ」

青田大尉が振り返ると、『老眼狂』『MOMOHIKI』の面々が
駆け寄ってくるところでした。
敵味方関係なく怪我人には肩を貸してます。

笠松さん「大丈夫かア！」

栗林さん「ゼエゼエ……」

片岡さん「フツ、一件落着のようだな……」

中尾兄弟「青田ア！」

桶川さん「マヂパネエっす！」

青田大尉「お前ら…」

孫「青田大尉、私…」

うつん、私たちゆとり世代頑張るよ！

頑張って頑張って…いまの日本を元気にするよ！」

青田大尉「お嬢ちゃん…」

青田大尉は私に頭を下げ、一言日本を頼む、と言った。
そうだ。

次は私たちが頑張るんだ！そうやって人は、リレーを繋いでいくんだ。

青田大尉「…すまんかった」

おじいちゃん「いいってことよオ。

損失は煙草の一本、安いもんさ」

おじいちゃんが歯を見せて笑った。

村田さん「たたた大変じゃあああああ！！！」

唐突な村田さん！

怪我で留守番してるはずの村田さんが駆けしてきた。
今度はなんなの！

村田さん「ワシの情報筋によると東京ドームの地下老人ホームから
チヨ婆さんが……」

脱獄したツツッ！！！！」

ええ！？

私のおばあちゃんが！

おじいちゃん「な、なんじゃと！！チヨが！」

栗林さん「に、日本はおしまいじゃア！」

おじいちゃん「フッ！おしまいになどせんよ！

皆の衆、行くぞッ！

チヨ婆さんの破壊活動を止めに！」

中尾兄弟&栗林さん「一人暮らしの同胞を救いにッ！」

片岡さん&桶川さん&村田さん&笠松さん「介護の実態を探るためにッ！」

青田さん「消えた年金を探すあてのない旅にッ！」

孫「おじいちゃん！夕飯までには帰ってきてね！」

おじいちゃん「孫……！」

ああ！」

じいじ「ワシたちの第二の人生は、これからだ！」

その旅が世界を救うと信じて——

完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5460p/>

私のおじいちゃん

2010年12月17日09時43分発行